

目次

大蔵虎光本狂言集の本文の異同について……………小林 賢次……………一  
——待遇表現に関して——  
意味の混同と語形の揺れ……………坂詰 力治……………三  
——『論語抄』に見える語をとおして——  
天の甘味・甘露・値遇・ひとしく……………小林 千草……………五  
——『こんてむつすむん地』の用語より——  
仙台藩儒松本靖斎・桜田簡斎とその言語……………金田 弘……………六  
『寛政重修諸家譜』における格助詞……………  
「の」「が」の待遇価値——幕府編纂書の文体をめぐって……………諸星美智直……………七  
西鶴好色物の心話文——好色一代男・好色五人女の場合——……………阿部 八郎……………二〇  
近世における形容詞シシ語尾の展開……………鈴木丹士郎……………二三

黄表紙会話文の口語性について……………	神戸 和昭……………	二〇
——山東京伝作『江戸生艶気権焼』の検討を中心に——		
浮世風呂における人称の階層差と男女差……………	小松 寿雄……………	二九
江戸語における終助詞の相互承接……………	中野 伸彦……………	二七
文末詞「ケ」——三つの体系における対照研究——……………	渋谷 勝己……………	二五
幕末の多字漢語……………	松井 利彦……………	三三
『合類節用集』『和漢音釈書言字考節用集』 における版權問題……………	佐藤 貴裕……………	三五
語誌「五百八十年」……………	鈴木 博……………	三九
『文明論之概略』の推敲の考察……………	進藤 咲子……………	二五
——第六章を中心に——		
『佳人之奇遇』における形式名詞コトの用法……………	齋藤 文俊……………	三九
発音からみた夏目漱石の江戸語……………	佐藤 武義……………	三五
「新山の手ことばの性格」……………	田中 章夫……………	四五
東京京阪言語違のことは……………	土屋 信一……………	三五
近代語の状態化形式の構造……………	金水 敏……………	三九
「レモンはビタミンCに富む」という表現をめぐって……………	林 謙太郎……………	四九
近代小説とアスペクト表現……………	北澤 尚……………	四七
——島崎藤村の作品を資料として——		
天道浮世出星操 総索引……………	山口 豊……………	四九
明治初年における曜日と呼称……………	松村 明……………	五七
執筆者略歴……………		五三

て様相を把握しておきたい。

## 二 甘味と甘露——重点調査

『こんてむつすむん地』における「甘味」は一八例、「甘露」は六例である。また、『コンテムツスムンヂ』における「甘味」は五一例、「甘露」は十八例である。両者の数値上の相違の多くは、国字本において省かれた章や簡略にされた章が存在することによってもたらされたものであり、「甘味」が「甘露」の約三倍使われているという事態にはかわりがない。

- ① 善のみちにいたりたらん人は、こ、にかくれたる天のかんみをおぼゆべし (1オ)
- ② こんてんぶらさん (＝Contemplação 観念・瞑想) のかんみをもて、しきたいのじゆう、しよくぶつをもわすれたまふ也 (14オ)
- ③ すみなれたるかくれがはかんみあり。みなれざればたいくつのもとひなり (17ウ)
- ④ ねがはくはしきしんのじようをのがれて、た、あにまのかんみのみあらんには (27ウ)
- ⑤ のぞみなきよきにあらず。又かんみある事みなよきにあらず (36オ)
- ⑥ 天のかんみもくるすにあり (37ウ)
- ⑦ 涙の御大切によてなんぎにあふ事を、かんみとおぼゆるくらゐにいたるにをひては、其ときあんどせよ (40オ)
- ⑧ われらがくどくも、われらがくらゐのたつする所も、おほくのよろこびかんみをえる事にはなく、た、をもき事心ぐるしき事をかんにするにあり (40ウ、41オ)
- ⑨ いかになんぢ、もろくのがくしやうのがくもんにまさりてかんみふかきわがことはをきけ (42オ)

⑩ ときとして、ろにをこる所の善のほつき、又はかんみある事はひとへにがらさのなしたまふところなり。これすなはち天の御くりにかんろをなめはじむる者也 (45ウ)

⑪ 御さくのもの、よろこびをはなる、ほど、およりなをかんみふかく大きなよろこびをうくべし (48オ)

⑫ なにたるにがき事をも、御身にたいし奉りてかんみのたのしみとおぼえ、これをのぞむやうにはからひたまへ (53オ)

⑬ かなしきかな、せけんしうぢやくしたるあにまは、じやらくにまけ、いばらからたちを身にまとひたる事をい

ぐはとおもふ事は、これいまだおのかんろをあちは、ず、しよぜんのかんみをもこ、ろみざるゆへ也 (54オ)

⑭ おにながらへ奉るみちをしゆぎやうする人は、真に身をいとひ、お御やくそくしたまふかんみをおぼえ、せかいのたばかりをわきまへしる者也 (54オ)

⑮ 大きな心のよろこび、ふかきかんみをえたりとてわが身は人にこえてすぐれたるしんくなる者なりとおもふ事なかれ (56ウ、57オ)

⑯ 其ときこそ心ぐるしき事いさ、かもなく、くはほういみしきよろこび、かんみふかきけらくにはあふべけれ (66ウ)

⑰ \*いかに子、なんぢ心のま、なる時すびつり「すびりつ」の誤刻) のかんみかんろをおぼゆるよりも、なんぎなんがんのとき、へりくだりてかんにんする事はなをわがないせうにかなふ也 (70ウ)

⑱ 其ゆへは、にはかにをこるいかりは御じひをもてほどなくしづまりて、心のいたみもかんみとなりかはるべし (70ウ)

①、⑱は、『こんてむつすむん地』の「甘味」の全例であるが、このうち、⑩が、ローマ字本では「かんみなる事は」(164)となり、⑰が、「いかに子、恵みの潤澤なる時、悦びの心と菩提心の大きなよりも」(334)のごとく大きく異なっている。

⑰の場合は、「悦びの心」＝「甘味」、「菩提心」(姉崎正治氏の脚注によると、ラテン文「Devotio.」＝「甘露」と対応しているので、これは、原文と訳語との関係上注目すべき用例となるであろうが、国字本、ローマ字本、「甘味」に